

●コレクション・データ

時代 縄文時代 草創期
採集地 多遺跡
発見年 1972年
大きさ 残存長7.8cm 重さ14g
展示位置 第3室・「田原本のあゆみ」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション

29

多採集の有茎尖頭器

今回紹介する有茎尖頭器は、飛鳥川の改修工事の際、多宮橋の北約100メートルの地点で、谷昭男氏によって採集された資料です。この地点は、弥生集落として知られる多遺跡の範囲内に位置します。

有茎尖頭器とは、先端が尖った打製石器のうち、基部に茎を作り出したもので、有舌尖頭器とも呼ばれます。二上山産のサヌカイトと原石とし、鹿角の先端を押し当てて、石を潰すように形を整えています。

さまざまなタイプがみられ、大型の一群を槍の先に付ける石槍、小型の一群を矢の先に付ける石鏃とする意見もありますが、その使い方を、明確に分ける事は難しいようです。ただし、今回紹介する有茎尖頭器は、先端が衝撃で欠けており、狩猟具として使われたことは確かでしょう。

ところで有茎尖頭器は、旧石器時代の終わりから縄文時代の始めごろ（草創期）に、日本全

国に出現します。このころは、氷河期が終わり温暖化する時期に当たっており、有茎尖頭器は狩猟の対象となる動物が変化するなかで、新たに開発された道具といえます。

これまで奈良盆地では、約70点の有茎尖頭器が知られていますが、ほとんどが県東部の山間部や、盆地周縁の高所から出土しています。これは、縄文時代遺跡の分布の傾向と一致し、盆地の低地部への遺跡の本格的な展開は、縄文時代後期以降です。

こうしたなか、盆地のほぼ中央で有茎尖頭器が出土することは珍しく、低地への人類の進出を考えるうえで貴重な資料です。また、同様の例は、宮古北遺跡でもみられますが、いずれの資料も単発的で生活の跡は不明瞭です。

低地で出土する有茎尖頭器は、あるいは水辺まで狩猟に来た人たちの落とし物かもしれませんが、その性格に関しては今後の検討課題です。

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 34・7100】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人 200円（150円）
▼高校生・大学生 100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置

